

ミクロンの微細技術に
大きな夢を託して

【第50回】

マシニング加工技術者

松浦 貴之 さん

日本のモノづくりの原点とも言われる大田区で、精密機械部品の製造を行う松浦製作所。「安く」「早く」が求められる量産品ではなく、ミクロン単位の加工が必要な一品ものを製造するのが同社の特色だ。社長の松浦貴之さんは、いかに高付加価値な部品を製造するかを考え続けている。

日本を代表する「モノづくり」の街、東京都大田区。松浦製作所は、その大田区で昭和15年から微細加工品、精密部品の製作を行っている。

同社が扱うのは量産品ではなく、熟練の技術者が機械を使って一点一点削り出し加工して製作するオーダーメイドの部品だ。製作された精密機械部品は、半導体や医療機器などの試作機や特注機器に用いられるほか、最新の人工衛星にも搭載されることもあり、2ミクロン(0.002ミリ)といった精度を求められる製品もある。

社長の松浦貴之さんは、松浦製作所の三代目。40歳で父から家業を引き継いだ。競争の激しいモノづくりの現場で生き残っていくために、より微細な加工ができるようシフトしていった。

「父の代にはプラスマイナス50ミクロン程度の精度で十分だったのですが、さらに微細な2~3ミクロンの仕事ができるように新しい設備を導入し、高付加価値の技術力を付けてきました。けっしてオンリー・ワンの技術というわけではありませんが、われわれのような町工場でこのレベルの微細加工ができることが当社の強みになっています」

他社が手を出さなかった難度の高い仕事を引き受け、失敗と苦労を重ねて完成させた部品を納品したときに、お客様から「まさか本当にできるとは思わなかった。品物を見て感動で涙が出た」と感謝のメールが届いた。量産品ではなく、一点一点にこだわった仕事をしているからこそその喜びややり甲斐だと松浦さんは言う。

より微細な加工に取り組む松浦さんのもう一つのこだわりが、「美しさ」だ。

「図面通りの微細加工ができて当然、納期も守って当たり前。ではどこで自社の価値を高めようかと考えた時に、『きれいなものを作ろう』と考えました。工業製品なのだから、美術品や工芸品のようには手をかけ過ぎてもいけません。でも、手にし

たときの質感の美しさ、取り付けのスムーズさといった、図面には表れていない部分が美しい部品を作りたいのです」

20年前は大田区に1万社近くあった工場も、今では3500を切っているという。それでも、これだけの数の工場が集積している利点は大きい。「部品に必要な材料を電話一本で届けてくれる。向かいにあるメッキ屋に持っていけば2時間で仕上げられる。地方では3日かかることが2時間でできるのが大田区」と、松浦さんは胸を張る。

同業者で競合するのではなく、お互いの強みを生かして協業することも大田区ならできるのだ。

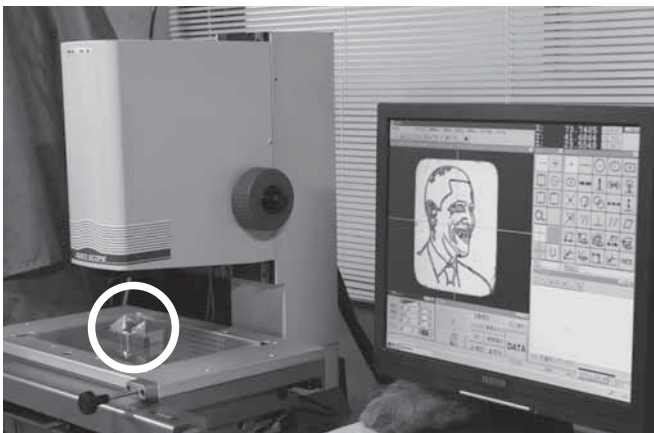
「私たちのように微細加工が得意な町工場も、大きな加工に長けている町工場も、一つの地域に共存しているのが大田区の特長です」

現場で作業することは少なくなった松浦さんだが、「硬い金属が自分の思いどおりの形に割れていく様子を見るのが何よりも楽しい。一時間ぐらい平気で眺めていられます」と目を輝かせる。

「今はまだ1ミクロンの精度の加工までは実現できていませんが、どうやってさらに精度を高めていくかが今後の挑戦です。ゆくゆくは、海外にある仕事を大田区に持ってきたいとも考えています」

目には見ることのできない微細な加工技術に大きな夢を託して、松浦さんの挑戦はさらに続いていく。

金属(円筒)の先端を拡大したのが、モニターに映ったイラスト。1.6ミリ×1.4ミリの広さに、26ミクロンの幅で描かれている。



まつうら たかゆき

精密機械部品を製造する株式会社松浦製作所の三代目社長。学生時代は、父親の背中を見ながらアルバイトとして家業を手伝い、25歳で正式に社員となって家業を継ぐことを決断。40歳の時に父親より社長の座を譲り受けて以来、より精密でより美しい部品作りに取り組んでいる。